

世界観サマリー

人類文明が栄華を極め、神が記録と僅かな信仰心の中で生きる時代。

復活した灰色の龍によって、その時代は唐突に終わりを迎えた。築き上げた文明は瓦解し、人類もそのほとんどが崩れ去る繁栄とともに消えていった。

神々は灰色の龍を倒すために立ち上がるが、彼らの中にこれを倒し得る者はいない。そこで神々は一計を案じ、灰色の龍を大いなる天空に封じること成功する。そして、天空を支える柱となることで、その封印に蓋をしたのだった。

それから幾年か。

残された人類は神柱の周囲という限られた土地の中で辛うじて存続していた。

しかし、その暮らしに安息はない。時を経て綻びが生じた封印の隙間から、灰色の龍の分身が染み出してきたためである。

そこで神柱は残された力を用いて、人類を守ることのできる者たちを生み出した。

その名は――。

柱の守(ハシラノカミ)

神柱を守る者。人間の子どものような姿をしているが、大地を流れるエネルギーから生まれた妖精や精霊に近い存在である。

神柱から「加護」という超常の力を授かっており、人間には倒すことのできない、鎖蟲を唯一倒すことができる。

神柱を守るという使命のもと、命をかけて戦い続けている。

神柱(カンバシラ)

地上から消えた神々の代わりに現れた巨大な柱。生物が生存できる環境を保つ効果があり、その周囲には緑が茂り、澄んだ水が流れる。

反対に神柱が崩壊した場所には、生物の存在を許さない灰の大地が広がっている。

灰色の龍(ハイイロノリュウ)

かつて人類の文明を滅ぼした邪龍。世界すらも滅ぼそうかというところで神々によって封印された。

その封印を破るために鎖蟲を生み出し、神柱を攻撃させている。

鎖蟲(クサリムシ)

灰色の龍によって生み出された怪物。真っ白で巨大な虫の姿をしており、神柱を朽ちさせる力を持つ。

明確な意志はなく、神柱を破壊するためだけに行動する機械のような存在である。

多くの個体が鎖のように繋がり、情報を共有している群れを形成するためこのように呼ばれている。

柱の杜(ハシラノモリ)

この国、日本の異称。多くの神柱が木々のように立ち並ぶ生物の楽園。

人々は各地にいくつかの都市を築き、かつての文明を取り戻しながら暮らしている。

そんな場所にも、鎖蟲の脅威は迫っている。

防衛軍(ボウエイクン)

生き残った人々により結成された防衛組織。鎖蟲を倒すことこそできないものの、多方面で柱の守と協力することで柱の杜に生きる人々を守っている。

世界の終わりにあって希望を失わず、戦い続ける意志を持った者たち。

――柱の守の目的は神柱を守ること。そしてそこに生きる命とその意志を守ること。

これは終末に抗う者たちの、戦いの物語である。